

「お月見どろぼう」の現状と研究視点

小早川 道 子

はじめに

「お月見どろぼう」とは、中秋の名月にあたる旧暦八月十五日に、子供たちが地区の家々でお菓子を買い歩くという行事である。近年、日進市や名古屋市東部、また三重県四日市市周辺などで盛んになり、地元マスコミなどにも注目されつつある。かつて中秋の名月の夜、子供たちがお供えのイモや団子などをそつと盗んでいった、という全国的な風習があり、それがもたくなって現代風の「お月見どろぼう」に変容してきたことは疑いない。本来行われていた、子供たちが供え物をそつと盗んでいく風習は「団子盗み」「イモぬすと」などと呼ばれ、柳田国男も『こども風土記』の「公認の悪戯」の項で、次のように記述している。

大阪郊外の村里などにも、八月十五夜の団子突きがつい近ごろまであったが、あれは全国的といってもよ

いほど、各地の子供に知られている悪戯であった。細い長い竹竿のさき、縫針や釘などを附けたものさえ関東にはあった。それを垣根の隙からそとさし入れて、縁端のお月見団子を取って行くのである。中には家の人たちがいる前で、さして来てやったと自慢する子がある。取られた家でも笑いながら代りを補充したり、または十五夜団子は盗まれるほど好いと言ったり、その盗んで来たのを貰って食べると、何かのまじないになるという人さえあったのだから、面白くてたまらなかつたわけである。⁽¹⁾

戦後の調査にもとづく文化庁の『日本民俗地図』⁽²⁾でもこの風習は各地から報告されており、特に関東から九州北部にかけての地域で広く行われていたらしい。しかし早くから報告はあるものの、この八月十五夜の「団子盗み」や「お月見どろぼつ」に関する研究は多くない。吉成直樹氏の「十五夜の盗み」⁽³⁾、⁽⁴⁾ 覚書「盗みと神意」⁽³⁾、高桑守史氏が『日本民俗文化大系』のなかで「盗み」という行為に着目して扱っているほかは、事例の報告がほとんどである。愛知県の「お月見どろぼつ」については、拙稿「尾張の子供行事」⁽⁵⁾（『名古屋民俗』第六〇号）で名古屋市長東区貴船の事例を、『日進市史 民俗編』で日進地域の事例をそれぞれ紹介している。⁽⁶⁾

以上を踏まえて本稿では、二〇一六年度の卒業ゼミナールでゼミ生と共に行った「お月見どろぼつ」の調査を中心として、現在の「お月見どろぼつ」の現状を報告し、この現代の民俗行事を研究対象とする場合の視点や課題等について考えてみたい。

一 「お月見どろぼつ」の分布

先述したように、東海地方では愛知県と三重県の一部で、いわゆる「お月見どろぼつ」が行われている。愛知

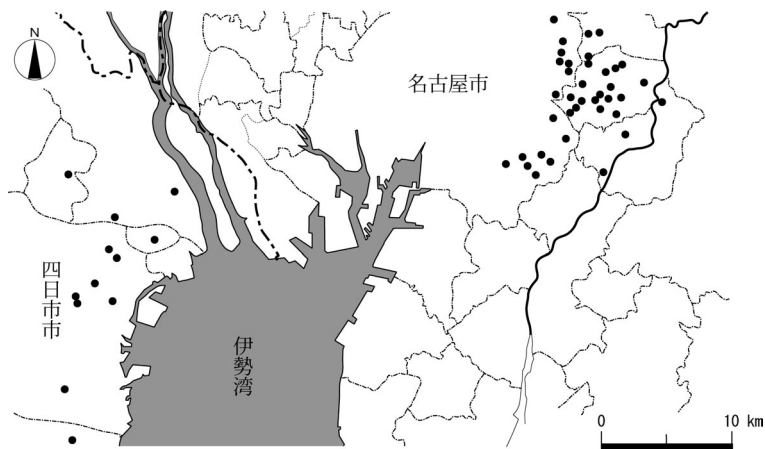


図1 「お月どろぼう」の分布（2016年現在、把握分）

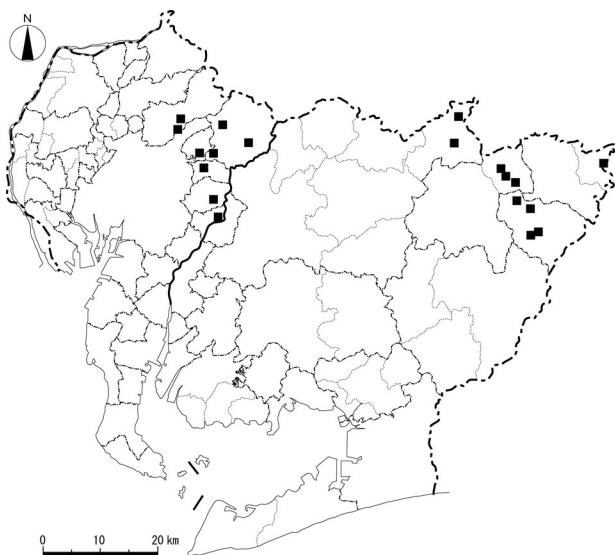


図2 十五夜（十三夜）の供え物を盗む習慣の分布
（『愛知県史民俗調査資料集成』より作成）

県では日進市のほぼ全域、長久手市、東郷町、名古屋市東部の一部、三重県では桑名市から四日市市にかけて、特に四日市市内で盛んである。しかし、ある地区では行われていても、隣の地区では行われていない・まったく知らない、という場合も多い。図1に示した分布図は、学生へのアンケート等で情報を収集したものであり、実際はもっと多くの地区で行われているようである。「お月見どろぼう」は近年拡大傾向にあり、今年度調査したなかでも「最近始めた」という地区があった。

柳田が記していたように、かつてはこの地域でも子供たちがそつと十五夜の供え物を盗んでいくやり方が一般的であった。日進市では「竹の先を尖らせたもので、お供えの団子を出して盗んだ」「そつと行って、縁側の下からお供えものを盗んだ」「お供えをしたら、縁側の下から子供の手がにゅつと伸びてびっくりした」などという話が多く聞かれた。名古屋市名東区貴船でも、昭和三十年代生まれの人が子供の頃は、まだそつと盗んでいくやり方だったという。「愛知県史民俗調査資料データベース」⁷⁾によれば、尾張東部と奥三河に十五夜（一部は十三夜）の供え物を子供が盗む事例が分布していた。尾張東部で現在「お月見どろぼう」を行っている地域は、ほぼこの分布域内と重なっている。

二 「お月見どろぼう」の現状

二〇一六年九月十五日（旧暦八月十五日）・十七日にゼミ生が調査した「お月見どろぼう」については、現在報告集を作成中であり、ここでは概要と傾向を大まかに報告しておきたい。ゼミでの調査地区は次の六地区である。⁸⁾



写真1 「お月見どろぼう」に行く子供たち
(日進市梨の木小学校区、2016年)

日進市梨の木小学校区・南小学校区の一部

名古屋市天白区梅が丘

名古屋市緑区大清水

名古屋市名東区上社

長久手市長久手西小学校区・長久手小学校区

三重県鈴鹿市河田町

の梨の木小学校区と南小学校区の一部は、名鉄豊田新線の日進駅に近い地区である。梨の木小学校は新設校で、周辺は大型のマンションや新しい分譲住宅が多い。子供たちは下校後すぐの午後三時半頃から地区内を回りはじめ、マンションの中まで入って友達の家の前などにあるお菓子をもらってきたりと、大変賑やかに行われていた。南小学校区の東山地区は、梨の木小学校区に隣接し、主に昭和五十年代後半から現在に至る新興住宅地である。こちらは午後五時頃から家々が子供のための菓子を置きはじめ、暗くなる頃まで子供たちが歩き回っていた。梨の木小学校区は自転車やキックボードでまわる子供も多かったが、東山地区ではほとんどが徒歩でまわっていた。ある母親によれば「何となく自転車は使わないことになっている。自転車で来ている子は、よその地区の子だと分かるので、見かけると『どこから来たの』



写真2 「お月見どろぼう」を楽しむ子供たち
(日進市梨の木小学校区、2016年)

などと声をかけるようにしている」とのことだった。よその地区の子供を排除することまではしないが、一応地区内の行事であるという意識が見てとれる。

の名古屋市天白区梅が丘も新興住宅地であり、現在も開発が進む地区である。ここでは旧暦八月十五日ではなく、近い土曜日に行っているとのことで、二〇一六年は九月十七日であった。ここは「お月見どろぼう」の盛んな日進市に隣接し、子供たちがそちらへ菓子をもらいに行ってしまったため、二〇年ほど前に有志が始めたものであるという。有志の役員が回覧板で告知したり、参加する家を募って「お月見どろぼうマップ」を作成したり、当日は見回りをしたりと、他地区とくらべると大人によってかなり管理されているのが特徴といえる。また、お菓子を出していない家の子供は参加できない、お菓子を出している場合は必ず家人がついていることなど、いくつかのルールも決められている。

の名古屋市緑区大清水、の名古屋市名東区上社は、現代の「お月見どろぼう」の典型といえる事例である。家の玄関先などに菓子を置いておき、子供が勝手に持って行くケースが多いが、の大清水ではインターホンを鳴らして家の人に菓子をもらったり、敷地内まで入って行って家の人にお菓子をもらうなど、色々なパターンがあった。訪ねていって菓子をもらう方法は、名古屋市長区徳重周辺でも「マンションまで子供たちが「お月見どろぼうです」とインターホンを鳴らして訪ねてくる」というところがある。これが問題視されて、マンション



写真3 マンション前での「お月見どろぼう」
(名古屋市名東区貴船、2014年)

ンのエントランスなどで子供のいる家がまとめて菓子を設置するなどの対応をとることになったという地区もある。

の長久手西小学校地区は、もともと隣接する長久手小学校区で「お月見どろぼう」を行っており、そちらに参加させてもらっていたが、昨年からは試みに始めたことであった。しかし子供が歩き回ることで「うるさい」などという苦情があり、今年は公園で有志の家族が菓子の交換会のような形で行っていた。他地区でも当然苦情がないわけではないのだが、ここでは苦情を気に思うような形で行えない、という点に様々な問題点が包

含されていると思われる。

は今回唯一の三重県の事例である。鈴鹿市河田町は、現在把握している中で、三重県の分布域のもっとも南にあたる。までは住宅地、それもいわゆる新興住宅地であったが、鈴鹿市河田町は古くからの農村集落であり、最近の移住者はほとんどいないという。また「お月見どろぼう」の時間も、までは明るいうちに始まっていたが、河田町は午後六時過ぎからと、暗くなつてからの行事である。菓子を置いてあるところは他地区と同様だが、家の人がついていることはなく、子供たちは暗い中を歩き回って菓子をもらい集めてくる。愛知県の事例とはやや異なり、古い形態が残存しているように見受けられる。

三 「お月見どろぼう」の諸要素と視点

(一) 地域と「お月見どろぼう」

「お月見どろぼう」を行っているところで、子供と一緒にいる母親たちなどに話を聞くと、おおむね肯定的な意見が多く返ってくる。「近所の人に子供を知ってもらえるし、自分も近所の人や子供たちと知り合える」(名古屋市名東区貴船)など、特に地区外からの移住者にはこういった意見が顕著にみられる。日進市のある若い母親も「引越してきて何も分からない時に『お月見どろぼう』を覚えてもらい、地域の行事に参加するきっかけができた」という。用意するのは駄菓子でよく、金銭的な負担が少ないことも、参加のためのハードルを低くしているようである。こういった点は、新興住宅地の特徴でもある。現代の「お月見どろぼう」は、移住者が地域に参加するきっかけとして機能しているのである。

また日進市の東山地区では、幼児を連れた若い母親同士が「で時々お見かけしますよね」などと声をかけ合い、話を弾ませる場面を見かけることがあった。「お月見どろぼう」では多くの地区で、小学生は子供同士数人のグループでまわっているが、未就学児は保護者同伴が普通である。近所に住んでいても知り合う機会がない現代において、子供と一緒に参加できる地区の行事、すなわち「お月見どろぼう」は、母親同士の交流の場ともなっているのである。貴船で小学生の子供を持つある母親は「かなり高齢のおじいさんが、スーパールでお菓子をたくさん入れたカゴを持って、レジで『一〇〇個ないといかん』といって数えてもらっていた。お年寄りも子供が来るのを楽しみにしてくれているので良い行事だと思つ」と話してくれた。「お月見どろぼう」が盛んな地区

では「もう孫は大きくなつたけれど、近所の子供たちが来てくれるのが楽しみだから」と菓子を用意している年配者も多い。子育て世代にとって、地域に子供が歓迎される行事が存在することは、心理的な支えにもなるのである。

その真逆ともいえるのが、の長久手市の事例である。隣接地区を参考に有志で始めたものの、苦情が出たことから今年には公園での菓子の交換会という変則的な形で実施せざるを得ず、今後はどうなるか分からない状態だという。行事が地域に受け入れられない理由は、子育て世代が少ない、地域に「お月見どろぼつ」経験者が少ないなど、様々な要素が考えられる。だが同様に有志が始めたの名古屋市天白区梅が丘は、様々なルール作りをして二〇年以上継続されている。他地区でも小学校や子供会などに苦情が寄せられているという話はあるが、子供たちに注意を促したり、訪問方法を工夫するなどして、行事の存続に影響を与えるまでには至っていない。長久手小学校区のほかに近年「お月見どろぼつ」を始めた（復活させた）地区には、名古屋市名東区高針地区などがあり、どのように継続されていくか注目したい。

地域が子供に寛容であることは、子育て世代の暮らしやすさや、居住地に対する満足度に繋がる。それが地域への愛着となり、「お月見どろぼつ」のような民俗行事の継承にも関わってくるのではないだろうか。地域と民俗行事の関わり合いという視点での研究は近年注目されており⁹⁾、「お月見どろぼつ」についても同様の視点が必要である。

(二) 「団子盗み」から「お月見どろぼつ」へ

かつて「団子盗み」「芋ぬす」となるといって、暗くなって満月が昇ってから子供たちがこっそり供え物を盗

んでいた時代から、現在の菓子をもらい歩く「お月見どろぼう」に変化したのはいつ頃なのだろうか。日進市では「団子盗み」がいったん消滅した後、昭和五十年代になって現在の形で行われるようになった、と言われている。ある市議員が関わって実現した、この話もあった。「団子盗み」方式がいつ頃消滅したかははっきり分らないが、日進市東山地区のある話者は「自分の子供（四十代前半）の小学生時代にはなかった」といい、確かに行われていなかった時代があったようである。複数の話者の話を総合すると、昭和三十年代にはこっそり持つて行く「団子盗み」の方式で行われていたが、昭和四十年代から五十年代にかけて中断し、昭和五十年代以降に現在の「お月見どろぼう」の形で復活した、という地区が多いようである。おそらく高度経済成長期を経て、様々な民俗行事が社会情勢などの変化により中断、または消滅していくなかで、十五夜の「団子盗み」も行われなくなっていたのだらう。現在の「お月見どろぼう」でもっとも心配されている交通事故も、高度経済成長期以降のモーターゼーションに端を発するものである。また子供の習い事の流行なども、夜間のお月見どろぼうを行うには障害となっていた。供え物も、市販の菓子が回るようになると、団子や里芋、小麦饅頭（小麦粉を練った皮で小豆餡を包んで蒸した自家製の饅頭）などを子供たちが好んで盗まなくなっていたことは必然であろう。ではなぜ「団子盗み」は「お月見どろぼう」として復活を遂げたのだろうか。それを示唆するのが、日進市本郷の左義長（ドンド）の復活理由である。この行事もかつては子供だけの手で行われていた。各家から松飾りや注連縄を集めてきて山をつくり、早朝に火を付けて燃やす行事である。せっかく集めた焚き物の山に、よその地区の子供がいたずらをしに来ることがあり（夜中に火をつけられるなど）、子供だけで夜通し見張り番をしたという。一時中断していたが、平成十四年になって地域の人々の手で再開された。「昔経験した子供たちが親になり、自分の子供にもあの楽しかった経験をさせてやりたい、ということでも復活させた」とのことであった。経験

者が地域にいれば、再開は比較的容易であろう。「お月見どろぼつ」が盛んに行われている日進市香久山や梅森台などは新興住宅地であるが、住民には同市内出身者も多く、子供の頃に「お月見どろぼつ」を経験している。楽しかった十五夜の行事を子供や孫にも経験させてやりたいが、昔のやり方のままでは難しいため、現代の事情に合わせた方法で復活した、ということのようである。今の子供が喜ぶ菓子を置き、時間も暗くなってからでは危ないので昼間に、と変化してきた結果が、現在の「お月見どろぼつ」の姿であろう。鈴鹿市河田町で今も暗くなってから行われているのは、旧集落で交通量が比較的小さいことから、昼間にする必要性が薄いためかと思われる。

(三)「お月見どろぼつ」は「ハロウィン」か

「お月見どろぼつ」では、菓子を入れた箱に様々なイラストが描かれていることがある。満月やウサギ、スキなど、十五夜にちなんだイラストが多いが、時折ハロウィンのカボチャのランタン（ジャック・オ・ランタン）やコウモリなどを描いたものも見かける。「お月見どろぼつ」はメディアなどでよく「和製ハロウィン」などと解説されることがあり、時期が近いために同じようなものと説明されることもある。

しかし、果たしてそうだろうか。実際に聞き取り調査をしてみると、「お月見どろぼつ」と「ハロウィン」は似ているが別の行事、と認識している話者が多いようである。日進市東山地区のある母親は「よそではハロウィンをやっている地区もあると聞くが、ハロウィンは仮装の衣装を用意する必要があるあたりで大変」であり、「お月見どろぼつの方が準備の手間もなくて楽でよい」とのことであった。菓子と共にスキやハギといった、本来十五夜に供える物を飾っている家も散見される。「お月見どろぼつ」はハロウィンとは別の、あくまで十五

ら行うことで、お菓子目的になってしまっているのは残念」という認識を持っている人が多い傾向があった。調査当時の三十〜四十代は、ちょうど日進市域で「お月見どろぼう」が復活した頃に小学生時代を過ごした層である。おそらく親や祖父母から、昔の様子を聞かされていたのだろう。一部にはまだかつてのやり方で行っていた地区もあったかもしれない。五十代以上と二十代では「盗む」という行為がトラブルにつながりかねないので、現代の生活に沿ったスタイルに変えるのは仕方がない」と、現在のやり方について肯定的な意見が目についた。このように「本来はこっそり盗んだものである」という伝承は生きており、今のところ日進市周辺の「お月見ど



写真4 菓자에添えられた「お月見」の絵
(日進市、2016年)



写真5 ハロウィンの絵を描いた菓子の箱
(日進市、2016年)

夜の行事として認知されているのである。

また、『日進市史 民俗編』編さん中の二〇一三年に、日進市生涯学習課市史編さん係で市職員に「お月見どろぼう」についてのアンケートを実施したことがあり、特に三十〜四十代の層は「本来はお月見のお供えをこっそり盗んでくるもの」であり「明るいうちか

るぼつ」は、十五夜の行事として行われている。

では、よく似た行事として説明される「お月見どろぼつ」と「ハロウィン」の違いは、どこにあるのだろうか。近年ハロウィンは渋谷駅前などの喧噪が報道され、話題になっている。仮装した若者が多数集まって騒ぐ、いわば仮装祭りの様相を示しているのは渋谷だけではなく、名古屋では栄や大須などの繁華街でもみられ、筆者が実見した二〇一五年の静岡市もかなりの人出であった。一方、首都圏の住宅地や、愛知県では春日井市の一部、みよし市の一部など、子供が仮装をして近所の家を廻り、菓子をもらい歩く形のハロウィンも広まりつつある。つまり現在日本で行われているハロウィンは、若者の仮装祭り型と、子供が菓子をもらい歩く型という二種類に大別できるだろう。「お月見どろぼつ」と似ているとされるのは、後者の子供が菓子をもらい歩く型である。

ハロウィンの場合、子供たちは仮装をして家々を訪ね、「トリック オア トリート」の合言葉を言っただけをもちろぬ。「お月見どろぼつ」でも家々を訪ね歩いて直接家人から菓子をもらう場合もあり、やり方としては同じである。ある地区でハロウィンとして行われるか、「お月見どろぼつ」として行われるかの違いは、前項で触れた十五夜の「団子盗み」の伝承の有無が関わっているのではないだろうか。「団子盗み」の習慣があった地域と、「お月見どろぼつ」が現在行われている地域はおおむね重なっていることから、かつて「団子盗み」を行っていた地域はそれが変化して「お月見どろぼつ」となり、元々そういった習慣がなかった、または早い段階で消滅してしまった地域では、外国の行事であるハロウィンが受け入れられつつあるのだろう。今後、ハロウィンが「お月見どろぼつ」のよつに継承され、クリスマスのような恒例行事となり、ゆくゆくは民俗行事となっていくのが注目される。

まとめにかえて

本稿では名古屋周辺で行われている「お月見どろぼう」について、現状を報告するとともに、今後の調査・研究に向けての視点をいくつか挙げてみた。子供と保護者という若い世代が中心となる行事であり、また都市圏では転入者も参加しやすい行事となっていることから、地域社会との関係については特に留意していきたい。子供たちのマナーについてはどの地区でも気を遣っており、大声で騒がないことや、きちんと挨拶をしてお菓子をもらうことなど、躰の場としても機能している。苦情への対応なども、地域ごとに工夫がみられる。小学校との関わりや、地域の商店・公的施設などの参加なども、民俗行事の継承にあたっては重要な要素である。地域が「お月見どろぼう」をどのように受け入れ、継続させているかという点は、地域社会と民俗行事のあり方について、様々な示唆を与えてくれるだろう。

「団子盗み」「芋ぬすと」から変化した「お月見どろぼう」は拡大傾向にあると冒頭でも述べたが、今後どこまで拡大していくのだろうか。外来のハロウィンと競合しながら、なお十五夜の行事として存続していくのだろうか。元々十三夜（旧暦九月十三日）の月見行事として「団子盗み」が行われていた設楽町萩平では、今年約六十年ぶりに「お月見どろぼう」を復活させている¹¹⁾。やはり「昔の風習を知ってもらおう」ということで、子供たちに昔の楽しかった行事を体験させてやりたい、という経験者の思いによって実現したものである。かつて行われていた地区や、その隣接地区では、今後も「お月見どろぼう」が復活したり、新たに始まったりする可能性はあるだろう。講義で紹介した際の学生からの感想として、経験者は「とても楽しかった」と口を揃え、知らなかつ

たという学生は「楽しそう」と羨ましが。また「小さい頃から地域に参加してきた人は、地元に愛着を持って
いる印象がある。地域の楽しい行事を復活させることで、若者の流出を防ぐことに繋がるのではないか」という
ような意見もあった。そういった観点からも「お月見どろぼう」は、民俗行事が見直されて、地域の「コミュニティ
で生かされている事例」として注目されよう。

本年度「お月見どろぼう」調査を複数箇所で行ったところ、地域ごとに様々なやり方や工夫が見られた。特
に最近始めたという地区が今後どのように継続していくかは注目される。また三重県四日市市周辺でも盛んに
行われていることが判明し、今後は愛知県の事例との比較なども行っていきたいと考えている。

本年度の「卒業ゼミナール」で行った調査については現在報告集を作成しており、近々完成予定である。各
地区の詳細については、報告集を参照されたい。

註

- (1) 柳田国男「こども風土記」、定本 柳田国男集 第二十一巻、筑摩書房、一九七〇年、三四～三五頁
- (2) 『日本民俗地図』一・二、文化庁、一九六九・一九七一年
- (3) 吉成直樹「十五夜の盗み」覚書 盗みと神意」『日本民俗学』一七五号、一九八八年
- (4) 『日本民俗文化大系』村と村人 一九九五年、二九七～三二五頁
- (5) 小早川道子「尾張の子供行事」『名古屋民俗』六〇、名古屋民俗研究会、二〇一五年
- (6) 『日進市史 民俗編』日進市、二〇一五年、四一三～四一五頁
- (7) 『愛知県史民俗調査データベース』、『愛知県史 別編 民俗1 総説』付録CD ROM所収、愛知県、二〇一一年
- (8) 各地区の調査は以下のゼミ生による分担で行った。

田中かれら・村木貴紀

小林麻里・森下歩夢・山崎将弘

木村有紀・原田 峻

今井香奈・苅谷涼太

伊藤友菜・澤田周平

伊藤彩佳・鈴木悠里

(9) 直近では日本民俗学会第六八回年会(二〇一六年)の公開シンポジウム「民俗学と「地域活性化」において、地域活性化のために民俗学は何が出来るか、地域活性化という課題に対してどう向き合っべきか、などの問題が取り上げられている。

(10) 日進市教育委員会生涯学習課が日進市職員に対して行ったアンケートによる。

(11) 『中日新聞』二〇一六年一〇月一七日朝刊